様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０１９８

研究課題名（和文）異文化間状況における対人関係構築のための会話能力の研究

研究課題名（英文）A Study of Conversational Competence: The construction of Interpersonal Relationships in Intercultural Settings

研究代表者
大津　友美（OTSU, Tomomi）

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師

研究者番号：２０４３７０７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、日本人学生同士の状況とは異なる異文化間状況で、関係を築いていくための、留学生・日本人学生の会話能力を明らかにすることである。その目的を達成するために、相互行為の能力は実際のやりとりの中で会話参加者によって共構築され具現化するという立場に立ち、会話分析の手法を用いて、会話参加者が異文化間状況の会話をどう行なっているかを記述した。第一に、留学生と日本人学生が雑談をする際、会話がスムーズに進み、ぎこちないものにならないように、会話参加者が行なっていることについて論じた。第二に、ディスカッションなど、大学生活のさまざまな場面での会話の分析を行なった。

研究成果の概要（英文）：　This study investigates the conversational competence of Japanese students and international students who reside in Japan and study in universities. Through the conversation analytic approach, this study describes the features of the students' interactional practices in intercultural settings, and discusses how the conversational participants can construct or develop their relationship with each other through the conversations. Firstly, it will be discussed how Japanese and international students conduct the casual conversations while they display their relationship such as friends through the talk. It will also be shown that international students who are second language speakers of Japanese can utilize a variety of linguistic and nonlinguistic resources and achieve skilled talk. Secondly, this study will outline the features of several types of talk which happen in the participants' university life, such as group discussions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：会話能力　相互行為能力　第二言語話者　日本語学習者　異文化間コミュニケーション　対人関係

１．研究開始当初の背景

日本の大学等で学ぶ留学生数は 2003 年には 10 万人を超え、さらに留学生 30 万人計画により、2020 年には 30 万人にまで増加する目途である。それに伴い、大学キャンパス内で留学生と日本人学生、また出身地域や第一言語の異なる留学生同士がコミュニケーションをする機会も増えている。そのように文化的背景の異なる者同士が互いに協力しながら理解しあい、よりよい関係を作るためには、双方が異文化間状況で対人関係を構築するためのスキルを身につけている必要がある。

留学生と日本人学生の対人関係構築に関しては、これまで質問紙・面接調査による研究が行われ、両者の親密化が困難であることの原因等が明らかにされてきた。しかし、これらの研究には、対象者から得られた回答が実際の行動とは異なる可能性があるという問題点がある。さらに、対人関係は一回一回のコミュニケーションの機会の積み重ねの上に構築されるものであるが、そのような機会にどのようなことが起こっているかはまだ十分に明らかにされていない。そのため、両者が実際に接触する場面そのものを研究の対象とする必要があるであろう。

そこで、筆者は、2007−2008 年度科研費（若手研究（B）「留学生と日本人学生の親密化を促進・阻害する会話行動の研究」研究代表者：大津友美、課題番号：19720122）の助成を受け、異文化間会話の分析を行った。そして、特に、留学生と日本人学生の親密化を促進・阻害する可能性のある会話行動にどのようなものがあるかという観点から考察した。

以上の研究によって、留学生と日本人学生の対人関係構築に関わる会話行動の一端を明らかにすることができた。しかし、それを踏まえて目指していかなければならないのは、異文化間状況で対人関係を築く際に留学生と日本人学生に必要となる会話能力の追究である。そこで、本研究では、そのような会話能力の解明を目指すことにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本人学生同士の状況とは異なる異文化間状況で、関係を築いていくための、留学生・日本人学生の会話能力を明らかにすることである。その目的を達成するために、具体的には以下の二つの研究課題をたてた。

第一の課題は、留学生と日本人学生が雑談をする際、会話がスムーズに進み、ぎこちないものにならないように、会話参加者双方が行なっていることを明らかにすることである。その際、留学生の文化的背景（出身地域）、会話参加者同士の関係、日本語第二言語話者である留学生の日本語口頭能力といった要因が会話のしかたにどう影響するかということについても考察を行なう。

第二の課題は、雑談以外の場面での相互行為を分析することである。文化的背景の異なる者同士の接触は、大学生活のさまざまな場面で起こる。そして、個々の場面には、それぞれに特徴的なやりとりの慣習があると考えられる。

３．研究の方法

本研究は、相互行為の能力は実際のやりとりの中で会話参加者によって共構築され具現化するという立場に立つ。会話分析の手法を用いて、微細な特徴に注目しながら分析することによって、会話参加者が異文化間状況の会話をどう行なっているかを記述する。

本研究が用いたデータは以下の通りである。収録した会話はすべて文字化した。

（1）二者間での雑談の録音・録画（各組 20 分～60 分）
- ①初対面の日本人学生同士 10 組
- ②初対面の中国出身の留学生と日本人学生 18 組（中級者 10 名、上級者 8 名）
- ③初対面の欧米出身の留学生と日本人学生 18 組（中級者 7 名、上級者 11 名）
- ④友人関係にある日本人学生同士 10 組
- ⑤友人関係にある留学生と日本人学生 15 組

（2）大学生活の中の会話の録音・録画（各組 20 分～50 分）
- ①友人同士のパーティー1 回分（留学生 4 名、日本人学生 2 名参加）
- ②教室内ディスカッション 4 回分（留学生６～７名）
- ③英語会話練習室でのグループトーク 2 回分（留学生 1 名、日本人学生 2 名）

４．研究成果

本節では、（1）雑談の分析、（2）大学生活での会話の分析の結果のうち、主なものについて報告する。

（1）雑談の分析

①日本人学生の会話能力：説明の始め方

第一言語話者は第二言語話者との会話の中でさまざまな調整を行なう。そのような調整の中に、第一言語話者が一旦口に出した発話について、自発的に説明を加えるということがある。その説明は、相手が知らないと考えられる言葉の意味の説明であったり、発話全体の説明であったりする。日本事情的な背景に関する説明であることもある。それでは、第一言語話者はそのような説明をどのように開始するのか。

友人同士である日本人学生と留学生の雑談を分析したところ、その説明開始方法には、その会話が「友人同士の雑談」であることが、色濃く表れることが分かった。日本人学生が「～って分かる？」「～、知ってる？」のような明示的な表現で留学生の知識の有無を問うようなことは少なかった。その代わりに、自らの発話途中で言いよどんだり、話すスピードを落としたり、発話を中断したりするこ

とで、留学生があいづちや表情などで理解を表示する機会を用意していた。そして、留学生の反応を細かに観察した上で、発話調整が必要かどうかを判断し、自らの発話を言い直したり、語の説明を始めたりしていた。

日本人学生がこのようなやり方をするのは、この会話が「友人同士の雑談」であることと関係があると思われる。友人同士の雑談は、対等な関係で、楽しくおしゃべりすること自体が目的となっているような会話である。そこで、もし、日本人学生が「〜って分かる？」「〜、知ってる？」のような明示的な表現で留学生の知識の有無を尋ねれば、「教える側」と「習う側」という関係が立ち現れてしまう。日本人学生は、相手との対等な関係を維持するために、上述の方法で説明を開始していたのではないかと思われる。

②留学生の会話能力：長く話し続ける方法

複数のターン構成単位（ＴＣＵ）から成る長いターンを保持し、言いたいことを最後まで言い切るには、会話の技術を要する。特に、日本語を第二言語として話す留学生にとっては、それは難しいことが予想される。しかし、日本語での口頭能力が中級レベルの留学生が友人である日本人学生と雑談するところを分析したところ、日本語での文構成や語の選択にまだ困難があるものの、さまざまな言語・非言語的リソースを用いて、ターンを保持し、長く話し続けることができることが分かった。

留学生はＴＣＵの終了部で、さまざまなリソースを用いて、ターンが続くことを示す。

第一に、あるＴＣＵが終了した時点で、間をおかずに次のＴＣＵに移行することによって、複数のＴＣＵから成るターンを実現させていた。留学生の発話は、流暢さが落ちて発話が中断したり、ポーズが見られたりすることも多いが、一つのＴＣＵ終了部から次のＴＣＵ開始部にかけては流暢さが落ちることなく発話がスムーズに行われ、相手にターンがまだ終わらないことを示していた。

第二に、すぐに言葉が出てこないために、間をおかずに次のＴＣＵへスムーズに移行することが難しい場合には、言葉の代わりに手の動きなど非言語的なリソースを用いて、まだ話が終わっていないことを示していた。会話相手である日本人学生はこれに反応し、長いポーズが生じてもあいづちをうつにとどめ、留学生の話の続きを待っていた。

第三に、ＴＣＵ末に、日本語第一言語話者の発話には見られない独特の音調を用いることによって、まだ話が終わっていないことを相手に伝えていた。そして、相手が待っている間に、留学生は複数のＴＣＵから成るターンを実現させていた。

中級レベルの留学生は、経験談など長い話をするときの様々なストラテジー使用には困難があるようであった。例えば、最初に前置きをすることでその後の発言スペースを確保することや、「〜けど」「〜から」「〜たら」といった接続形式を用いて話をつなげていくことはあまりなく、いわゆる単文が多い。しかし、ＴＣＵ末の音調が下降しないようにコントロールすることで、次のＴＣＵが続くことを示し、ターンを保持して話しきることに成功していた。

教室内のやりとりとは異なり、雑談では、自分が話したい話題を自分で開始する、自分が話したい時にターンを取って自ら話し始める、最後まで話しきれるようにターンを保持するといったことが重要になる。それができなければ、せっかく同じ大学に通う学生同士などで雑談できる機会があっても、十分に参加することはできず、互いに親しくなることは難しいかもしれない。しかし、本研究のデータの留学生は、限られた日本語力で言語的な困難はあったものの、会話進行には積極的に関わることができていた。

③雑談中の相手に対する非好意的評価：相互行為の記述

上述のとおり、日本人学生も留学生も雑談をスムーズに進め、相手との関係を構築・保持するためにさまざまなことをしている。しかし、それでも、雑談中に、会話参加者の一方が相手の行動を非好意的に評価することがある。筆者は以前、初対面状況で、留学生が日本人学生の会話行動にどんな印象を持つか、どんな側面を非好意的に評価するかを調査したことがある。その結果、留学生は特に日本人学生がどう会話進行に関与するかを重視していることが分かった。具体的には、留学生が質問しているのに、日本人学生が最低限の返答しかせず話をふくらまなかったこと、留学生が早く切り上げたいと思っていた話題を日本人学生が長引かせたことなどが、留学生によって非好意的に評価されていた。

しかし、それは本当に日本人学生の側だけの問題なのであろうか。会話は参加者全員によって共に構築されるものであることを考えると、留学生が非好意的に評価した日本人学生の行動も、実際は留学生と日本人学生双方のやりとりを通して構築されたものなのではないか。本研究は、非好意的評価がどのようなやりとりを経てなされたものなのかを記述し、会話参加者の一方に非があるためそのような評価に至るのではなく、会話参加者双方の行動が原因となりえるということについて論じた。

以下に、留学生が初対面の日本人学生の行動に対して、何らかの非好意的評価をした場合について、報告する。

第一に、ある留学生が会話相手であった日本人学生に対して、「私から質問しないと話してくれない。私と話をしたくないみたいだった。」と感じたという会話断片を分析した。その結果、「留学生の質問－日本人学生の最低限の返答」という隣接対のあと、「日本人

学生による返答終了の再表示」がくり返し起こっており、このような日本人学生の行動によって留学生が相手への働きかけを続けていかざるをえなくなったと考えられる。その一方で、留学生には質問以外の選択肢もあったはずなのに、いつも質問で相手に働きかけていたことが観察された。日本人学生と留学生双方のふるまいによって、「留学生の質問－日本人学生の最低限の返答－日本人学生による返答終了の再表示」というパターンが構築され、留学生の日本人学生に対する非好意的評価につながったのではないかと思われる。

第二に、ある留学生が自国内の経済格差について聞きたがった日本人学生について、「もっと楽しく話せる話題があるはずなのに、なぜ経済格差のことを聞いてくるのか。」と感じたという会話断片を分析した。その結果、日本人学生がさまざまな方法で留学生の出身国の経済格差を話題に取り上げ、発展させようとしていたことと、留学生がその話題を切り上げられる可能性のある箇所で、相手に更なる働きかけのきっかけを与えてしまったことが観察された。それらの行動によって、留学生が初対面会話では不適切と考える経済格差の話題が長く続き、非好意的な評価につながってしまったのではないかと思われる。

（2）大学生活での会話の分析

①教室内ディスカッションの分析

留学生が日本人学生や他の留学生と友人になるきっかけは何かを知るために、学部留学生を対象にアンケート調査を行った。その結果、最も多かったのが、同じ授業に出席していたことと、ゼミなどで課される課題をグループで一緒に取り組んだことで、学習場面でのやりとりが親密化の重要なきっかけになることが分かった。そこで、本研究では、学生がそれぞれ別の文献を読み、それについて口頭で報告した後に、全員でディスカッションを行うという学習場面の分析を試みた。

その結果、ディスカッションの様相は、その直前に行われた文献内容の口頭報告次第で大きく変わることが分かった。分かりやすい口頭報告の後のディスカッションでは、報告者に対して助言や好意的かつ具体的なコメントが多く見られ、意見交換も活発であった。一方、分かりにくい口頭報告の後のディスカッションでは、事実関係の確認を求める質問や「よかったです」など具体性に欠ける無分析なコメントが多く、沈黙が起こりがちであった。

②英語会話練習室での会話の分析

日本の大学では、英語での会話の練習がしたい日本人学生のために、英語会話練習室が設けられていることがある。そこには英語を第一言語として話す教員が詰めていることもあれば、学生同士がペアやグループに分かれ自主的に練習を行うこともある。また、そこには日本人学生と知り合いたい留学生が訪れることも多い。本研究は、ある総合大学の英語会話練習室で行われたグループトークの分析を行った。

その結果、主な使用言語が英語になることから、日本人学生と留学生の立場が（1）で述べたものとは逆転することも多く、日本人学生がさまざまな言語・非言語的リソースを用いて、文法や語彙のコントロールの難しさをカバーし、会話を成り立たせていることが分かった。英語会話練習室での会話は、雑談に近く、会話進行は会話参加者自身で行われる。そのため、教室の中でよく用いられる「initiation-response-feedback (I-R-F)」のパターンは見られず、自ら initiation を行い、会話を進行させていく必要がある。日本人学生が自らターンをどう取るか、また、質問などを他の会話参加者に宛て、どう次の話者を選択するかに注目して分析したところ、日本人学生が、視線や手の動きなどを使って次話者を選択する、他者の話の途中で自分のあいづちを目立たせ、次のターンを取るといった行動が見られた。

（3）本研究の意義と今後の展望

本研究は、実際の異文化間状況での会話を分析することによって、留学生と日本人学生が互いに対人関係構築のためにどのようなことをしているのか、その一側面を明らかにすることができた。質問紙や面接による調査では、調査対象者の記憶のあいまいさ、行動規範、期待などが結果に影響したり、対象者の意識に上ったことしか知ることができなかったりと、さまざまな制限がある。それに対し、本研究は会話の微細な要素に注目し、分析することによって、会話に参加する当人達も気づいていない現実により良くアプローチすることができたのではないかと思う。

また本研究には、分析の際、会話参加者同士の関係や日本語第二言語話者である留学生の日本語口頭能力といった要因によって会話の様相が異なることを示せたという意義もあるであろう。一口に留学生と日本人学生の会話といっても、会話参加者がどんな者であるか、そしてその時にどんなことが話題になっているかなどによって、さまざまである。そのため、今後も本研究で行なったようなコンテクストを重視した分析を続けていく必要がある。

本研究は、留学生と日本人学生の対人関係構築に関わる会話能力に焦点を絞って調査を行ったが、今後はさまざまな場面で行なわれる異文化間相互行為の分析をし、その実態を解明していく必要があるであろう。例えば、今回は小規模な調査しか行なえなかったが、講義や自主ゼミなど留学生が参加する学習場面での相互行為でどのようなことが起こっているのかを知ることは、留学生と日本人学生の共学を進めようとしている日本の大

学にとって、重要な課題になるであろう。また、日本で生活している外国人は留学生だけではない。そのような人々が職場や地域で参加する会話ではどのようなことが起こっているのかなどにも、今後、研究を発展させていくことができるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 大津　友美、留学生から非好意的に評価された日本人学生の会話行動−非好意的評価に至るまでの相互行為の記述−、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読無、2014、第 40 巻、125−136
② 村田　和代、井出　里咲子、筒井　佐代、大津　友美、第 32 回研究大会ワークショップ　雑談の美学を考える−その構造・機能・詩学をめぐって−、社会言語科学、査読無、2014、第 16 巻第 2 号、112−118
③ Otsu, T., Krug, N.P., Turn-taking practices in conversation-for-learning, Pragmatics and Language Learning, 査読有, 2013, Vol.13, 79−102
④ 大津　友美、留学生は日本人学生の会話行動をどう評価するか−中国人留学生と日本人学生の初対面会話の場合−、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読無、2013、17−29
⑤ Krug, N. P., Otsu, T., Refraining from becoming the next speaker: A case study of three-party second language interaction, KOTESOL Proceedings 2011, 査読無, 2012, 251−259

〔学会発表〕（計 11 件）

① Otsu, T., First language speakers' perturbations as interactional resources in conversations with second language speakers of Japanese, 13th International Pragmatics Conference, India Habitat Centre, New Delhi, India, 2013 年 9 月 12 日
② 大津　友美、日本語第二言語話者との雑談における日本語母語話者の「説明」、社会言語科学会第 32 回研究大会、信州大学、2013 年 9 月 7 日
③ 大津　友美、日本語非母語話者は長いターンでどう話すか、「言語と人間」研究会 2013 年 6 月例会、立教大学、2013 年 6 月 8 日
④ Otsu, T., Krug, N.P., Rethinking competence: Learners' perceptions of their interactional practices、 The 5th N.E.A.R. Language Education Conference, University of Niigata Prefecture, Niigata, Japan, 2013 年 5 月 20 日
⑤ 大津　友美、接触場面での日本語母語話者による他者修復−母語話者による理解表示と非母語話者の反応について−、社会言語科学会第 31 回研究大会、統計数理研究所・国立国語研究所、2013 年 3 月 17 日
⑥ 大津　友美、接触場面の会話において非好意的評価はどう構築されるか−留学生から日本人学生への評価に注目して−、第 40 回日本語教育方法研究会、東京大学、2013 年 3 月 10 日

６．研究組織
(1)研究代表者

大津　友美（OTSU Tomomi）
東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師
研究者番号：２０４３７０７３